# 成人期のなかまたちが教えてくれること

## 第4回
## 集団のなかで自分らしく

滋賀大学　白石恵理子

しらいし　えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。おもな著書に『一人ひとりが人生の主人公』『しなやかにしたたかに仲間と社会に向き合って』『保育・教育のための発達診断』（共著）（いずれも全障研出版部）『人間発達研究の創出と展開―田中昌人・田中杉恵の仕事を通して歴史をつなぐ―』（共著）群青社など多数。

個を大切にすること、一人ひとりのニーズをつかんで支援を行うことはもちろん必要なのですが、それは決して個別支援だけを意味するものではありません。一人ひとりをきりはなしてバラバラにしてしまえば、そもそも「その人らしさ」「かけがえのなさ」は意味をもちません。一人ひとりが「その人らしく」生きていくためにも、集団や他者との関係をとらえることが不可欠です。今回は、集団やなかまと過ごすことのねうちを考えてみたいと思います。

### 「みんなといっしょに自分でする」

田中昌人さんは『講座　発達保障への道』（全障研出版部、1974、2006復刻）のなかで、全国に先駆けて保育園に重い障害のある子を受け入れていった大津市のことを書いています。そのとりくみは、つくし保育園という民間園での実践からはじまっていきました。1967年、多動で片時もじっとしていないタカシくんの入園にあたっては、園内でも大きな議論があったようです。加配制度もない当時、保育者の負担が増えることは目に見えていましたし、タカシくんの安全を守れるのか不安も大きかったことでしょう。しかし、家の中でのお母さんとの生活はぎりぎりの状況になっており、「働くお母さんを応援しよう」という思いでつくった保育園なのだから、たまたま子どもに障害があるからといって受け入れないのはおかしいという意見で職員集団は一致し、タカシくんの入園が実現します。ただ、その後の保育園生活のなかでタカシくん自身が発達したのかどうかについて確信になるまでには至らなかったと言います。

4年後には、重度の発達の遅れをもつユミちゃんが入園します。5歳のユミちゃんは、手を支えられて歩いていました。数ヵ月たったある日、おやつの時間となり、クラスメイトのノブちゃんが「ユミちゃん、おやつやで」と声をかけます。すると、ユミちゃんはノブちゃんに向かって一人で歩いたのです。先生たちは、「保育園生活のなかで障害のある子自身が発達するのだ」と喜びます。しかし、夕方、お迎えにきたお母さんに報告したところ、「え？　家では前から歩いていました」と言われ、「なんだ、保育の力で歩けるようになったわけではないのか…」と先生たちは落ち込んだそうです。しかし、その後、落ち込んだ自分たち自身のとらえ方が間違っていなかったかという話し合いになっていきます。

田中昌人さんは、そのことについて、「人格の解放をきりはなして『能力の発達』だけをとらえていると、『一人でする』も同じ結果をもたらすものとしてしか理解できなくなったりします。しかし、人格の解放と結合した能力の発達をめざしていくとき、『一人でする』だけでは『能力の発達』は実現できても人格の解放は困難であり、『みんなといっしょに自分でする』なかで実現するものは得られないことがわかってきます」と書いています。歩けるようになったという能力の発達だけで見るのではなく、ノブちゃんに向かって歩いたこと、家でお母さんとの関係でできていたことが、保育園で友だちとの関係でできるようになったことの意味やねうちを考えたとき、そこにはユミちゃんの「人格の解放」があると言うのです。もちろんそれは、ただ集団に放りこむだけで実現するものではなく、集団そのものの発達を創り出してきた保育があったからであり、田中さんは「集団のなかに差別を許さない民主主義を実現」する課題とまとめています。それは、集団のなかで一人ひとりを大切にすることであり、同時に一人ひとりを大切にできる集団づくりということになるでしょう。